

祖母世代を中心とした近隣住民が行う子育て支援活動が母親にもたらす変化に関する主観的認識

田崎 裕子 長岡崇徳大学看護学部

I. 背景

近年、核家族化の進行や近隣関係の希薄化等により、育児負担は母親へ過度に集中しやすい状況となっていることが指摘されている。国や自治体は多方面から子育て支援を実施しているが、育児不安や孤独感を抱える母親は依然として多い現状である。

政府は「地域共生社会」の実現を掲げており、子育て支援においても近隣住民を含む多様な関係機関・職種と協働できる支援体制構築が求められている。先行研究では、地域住民や高齢者との交流が育児期の母親の心理的安定や地域への思いを高めることが示されており、地域に居住する祖母世代が子育てに果たす役割への期待は高まっている。しかし、祖母世代の近隣住民による子育て支援が母親へどのような変化をもたらしたかについては、十分に明らかにされていない。

II. 目的

祖母世代の近隣住民による子育て支援活動が母親にもたらした変化を母親の主観から明らかにすること

III. 方法

1. 研究デザイン

半構造化面接による質的帰納的研究

2. 対象

対象者は、当該子育て支援活動に複数回参加した母親 10 名とした。対象地域は、人口流動性が高く核家族世帯が多い地方都市 A 市のうち、A 市平均より出生率が高く、新興住宅地が整備されている小学校区とした。対象活動は、A 市において母子保健推進員に任命されている祖母世代の近隣住民が主に乳児親子の交流を目的に小学校区単位で企画・実施する活動とした。活動は、月 1 回程度、地域の公民館等で開催され、数組～十数組が参加。内容は座談会や水遊びなど多岐にわたる。祖母世代の近隣住民は 60～70 代中心に構成され、研修を受講している。

3. データ収集方法及び分析方法

2024 年 7 月から 10 月にかけて、1 人あたり 40～60 分の半構造化面接を実施し、参加者の基本属性と活動への参加が自身・育児・家族・地域への思いや行動に与えた変化について語ってもらった。収集したデータは、母親が認識した思いや行動の変化に関する文脈を意味内容ごとに抽出してコード化、サブカテゴリ化・カテゴリ化する手順で分析した。

4. 倫理的配慮

所属大学研究倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

1. 対象者の属性

年齢は平均 33.5 歳、いずれも核家族世帯、活動初参加時の居住期間は 2 カ月～8 年、活動初参

加時の子の月齢は生後約2か月～13か月、合計参加回数は2～10回であった。

2. 母親が認識する祖母世代の近隣住民が行う子育て支援活動が母親へ与えた変化（表1）

123のコードから17サブカテゴリ、4カテゴリを抽出した。以下、カテゴリを【】で示す。

1) 【祖母世代による情緒的・手段的サポートによる心の安定】

母親は、友人や同世代の母親、家族には話にくい家庭や育児に関する愚痴や悩みを祖母世代の近隣住民へは話すことができ、共感的に受け止めてもらえたことによって心理面の肯定的変化を認識していた。また、祖母世代の近隣住民が積極的に子どもの世話をしてくれることで、活動への参加のしやすさや育児の精神的負担の軽減、安心感の獲得などを実感していた。

2) 【祖母世代の橋渡しによる交流創出と育児情報獲得】

母親は、祖母世代の近隣住民が母親同士をつなぐ橋渡しをしたことで母親間交流が創出し充実したと認識していた。また、母親同士の交流から、育児情報や子の成長の見通しを得ていた。

3) 【祖母世代から得た知恵の実践】

母親は、祖母世代の近隣住民から実践的な育児や地域に関する情報を取得し、それによって子への声かけの増加や夫婦間のコミュニケーションを工夫するようになった等の自身の行動の変化を認識していた。また、祖母世代の近隣住民は長期間居住する地域の生活者として身近な地域の情報を提供してくれる存在であり、それにより外出機会が増えたことを認識していた。

4) 【近隣への信頼と安心感の獲得】

活動を通して祖母世代の近隣住民と交流したことは、母親に身近に支えてくれる存在がいるという確かな実感をもたらし、日常生活における近隣への安心感の獲得や地域との繋がりへの自覚、外出のしやすさへ波及していた。また、活動を通して祖母世代の近隣住民から日常生活に密着した地域情報を得たことによって、地域への親近感が芽生えたことを認識していた。

V. 考察

本研究において特に着目すべきは、母親が祖母世代の近隣住民との関わりを通じて【近隣への信頼と安心感の獲得】を認識した点である。母親の語りからは、子育て支援活動への参加を通して祖母世代の近隣住民と交流したことで、近隣に頼れる存在がいる実感と近隣への安心感を獲得し、地域との繋がりへの自覚と外出のしやすさを認識していることが明らかとなった。先行研究では、地域で暮らす他世代の支えは母親に近隣とのつながりの大切さを認識させ安定した子育てを可能とし¹⁾ 地域との関係づくりは安心不足に対する大事な役割を担う²⁾ ことが報告されている。本研究では、【近隣への信頼と安心感の獲得】がどの程度母親の育児不安に影響するかまでは明らかにしていないが、多方面から子育て支援が拡充されても依然として育児不安を抱える母親の割合が高い水準で推移している現状を鑑みると、母親が近隣への信頼と安心感を抱けたことは、子育て支援活動を母親と同一小学校区に居住する祖母世代の近隣住民が行なう大きな意義を示していると考えられる。

〈参考文献〉

- 1) 秋葉理江・田口（袴田）理江、河原智江他：孤独感を抱えていた初産婦が近隣住民とつながりを築いていく過程。日本地域看護学会誌、15(3):23-31, 2013.
- 2) 岡本聡子：母親の育児不安解消における地域子育て支援拠点事業の効果利用者アンケートを通じた測定と検証。創造都市研究 e, 10(1), 2015.